

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
個人研究費
2006 年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	社会学部・助手	本田 量久 印
研究課題	黒人社会学者 W・E・B・デュボイスの平和主義と現在	
研究期間	2006 年度	
研究経費	480,000 円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、アメリカ黒人社会学者 W・E・B・デュボイス (1868~1963 年) の著作・資料を分析し、以下の点を明らかにする。第一に、世界的文脈を念頭におきつつ、人種主義、資本主義、植民地支配、戦争の構造的関係性に関するデュボイスの社会学的考察の妥当性を問う。第二に、人種・民族やイデオロギーを超えた世界的連帯、そして、それに基づく世界平和の実現を目指したデュボイスの運動戦略の可能性/制約条件を考察する。第三に、マサチューセッツ州における平和運動に関する調査を行ない、普遍的な自由・平等と世界平和の実現に向けたデュボイスの運動戦略が今なおアメリカの平和主義者に受け継がれていることを明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[デュボイス]

[コスモポリタン・デモクラシー]

[平和運動]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、マサチューセッツ大学デュボイス図書館などにおいて、デュボイスが残した著書・資料(国連請願書、政治パンフレット、雑誌論文、日記、手紙、講演録)、政府資料、二次資料を収集しつつ、マサチューセッツ州における平和運動に関する調査を行なうことによって、以下の点を考察した。

まず、デュボイスに関する文献研究であるが、第一に、人種主義、植民地主義、戦争などと構造的に結びつきながら構築されていった世界システムに関するデュボイス社会学の妥当性とその現代的含意を問うた。欧米諸国を中心に共有されていた白人優越論的な人種主義、アメリカ国内および第三世界において行なわれていた非白人に対する労働搾取、「文明化による前進」や「キリストによる救済」といった名目による第三世界の植民地支配、「世界平和」「民主主義」「正義」の名の下に欧米諸国を中心に闘われた第一次・第二次世界大戦、朝鮮戦争、冷戦対立といった世界規模での軍事対立、以上、これらの要因がそれぞれ連動しながら、民主主義や世界平和を犠牲にした世界秩序が構築されていったとするデュボイスの社会学的研究が 1950 年代のみならず、時代を超えて今日の世界情勢を考察する際にも妥当であることを明らかにした。

第二に、以上で述べたような世界情勢の超克可能性に関するデュボイス社会学とその現代的意義を検討した。1990 年代以降、A・ギデンズらが展開するコスモポリタン・デモクラシー(以下、CD とする)に関する先行研究は、環境問題や核危機といった世界的に共有されたリスクとその超克可能性を論じている。本研究は、先行研究を参考にしながら、世界平和や CD の実現可能性に関するデュボイスの社会学的業績を読み解きながら、反人種主義、反植民地主義、平和主義を求める世界的連帯と世界規模での運動の有効性を明らかにした。

また、反人種主義、反植民地主義、平和主義を訴えながら世界的にデュボイス自身が展開した運動とその戦略——たとえば、外国組織との連携、国際会議の開催、国連への請願書提出、各国政府関係者との接触など——の社会学の含意についても、文献研究を通じて考察した。そして、デュボイスの運動戦略が世界やアメリカ政府を動かすうえで現実に有効性をもっていたということを示した。特に、デュボイスは、第二次世界大戦、国連の創設、冷戦対立といった時代背景にあって、アメリカ政府が第三世界の声を含む国際世論を無視しえない状況を巧みに利用しながら、世界的な運動を戦略的に展開していたことについても明らかにした。

以上の二点を踏まえたうえで、第三に、アメリカ・マサチューセッツ州で活動する平和団体および平和運動参加者に接触し、組織創設の動機、組織の目的・理念、活動内容、メンバーの構成、メンバーの参加動機、組織の運動戦略、海外組織も含む他の組織との連携などについて、アンケート調査とインタビュー調査を行なった(調査期間は、2007 年 3 月 9 日～22 日)。

組織は、自分たちの目標を実現するためには、偏狭な特殊利害を前面に押し出すのではなく、より普遍性の高い全体的利害を訴えながら、他の組織と連合を組み、共感者の範囲を広げる方が有効である。実際に、デュボイスが世界中で展開した反人種主義、反植民地主義、平和主義を訴える運動にはその傾向が強くみられる。また、キング牧師を中心に展開した 1950、60 年代の公民権運動はまさにその通りで、黒人の利害のみならず、人権全般の保障やすべてのアメリカ国民の自由・平等を訴えることによって、宗教団体、女性団体、労働組合、平和団体、弁護士、政治家・政府高官を巻き込むことによって、勢力を広げていった。

本研究では、マサチューセッツ州の平和運動に関しても、同様のことが言えることを明らかにすることを目指したが、時間的制約から十分なインタビューはできなかった。しかし、自由回答を中心としたアンケート調査では、28 名の反戦活動・平和活動

研究成果の概要 (つづき)

に関わっている人たち(平和団体メンバー、3月17日にワシントンで行なわれた反戦デモに参加したマサチューセッツ大学学生・周辺住民)の協力を得ることができた。彼/彼女たちは、イラク戦争について特に強い関心を示していたが、彼/彼女たちの関心はより包括的であると言ってよいだろう。回答者は、愛国法、人権問題全般(捕虜の人権、パレスチナ問題、アフガニスタン、ダルフル問題)、同性愛結婚、中絶問題、環境問題、ハリケーン・カトリーナ、人種問題、移民問題、階級格差、教育、福祉などを関心事項として挙げており、彼/彼女たちは、必ずしも「紛争の不在」のみを意味しない、より包括的な状態として「平和」というもの捉えていることを示している。このように社会意識の延長線上に、彼/彼女たちの平和運動という実践があるのではないかと解釈している。そして、彼/彼女たちは、個人的な政治的スタンスから平和運動に関わっているというのが実態であると言えよう。

組織レベルの活動であるが、ベトナム戦争のときに結成された平和団体の指導者(彼とは2005年8月に知り合って、それ以来、Eメールなどでコンタクトをとり続けている)にインタビューをしたところ、他の組織との連合を形成するなどの運動戦略は採用していないとのことであった。彼/彼女たちの活動は、地域での草の根的な啓蒙活動を中心としており、この組織に対する地域住民の反応は好意的であるように思われた。彼らは日曜日に地域のコモンで反戦を訴える垂れ幕を掲げながら、信号待ちをしているドライバーや歩行者にパンフレットを配布しているが、クラクションを鳴らして、手を振りながら、自らパンフレットを手渡すように訴えるドライバーも何名か見ることができた。2003年3月19日にイラク戦争が開戦してしばらくの間、この地域にも戦争を支持する住民が多かったが(上述のアンケートでも、19名が、世界平和を訴えたがゆえに、圧力を受けた経験をもっている)と回答し、また、そのうち数名が、その内容を詳細に記述している)、しかし、この指導者や組織のメンバーは、このような地道な活動は、住民の意識を大きく変える力になったという実感を表明している。

なお、デュボイスの精神が平和運動に関わっている人たちにどれほど共有されているかどうかは正確に把握することはできなかった。ただし、一般的にはデュボイスの知名度は低いにもかかわらず、彼/彼女たちの多くが彼の名前を知っており、更には、かなり彼の著作や活動に触れている人もいた。上述の平和団体のあるメンバーは、デュボイスの著作や平和運動から、強いインスピレーションを受けて、1960年代に公民権運動に参加し、また、ベトナム反戦運動や今日のイラク戦争反対運動に参加しているとのことであった。

最後に、以上の調査は、方法論的には、多くの欠点を抱えていることを明記しなければならない。アンケート調査は、サンプリングをしておらず、母集団も設定していない。また、回答数は28名だけであった。しかし、アンケート調査は自由回答を中心としており、後にインタビュー調査を行なうための予備調査として位置づけている。よって、アンケート調査の結果を基にして、2007年8月、9月に改めて回答者にインタビュー調査に協力して頂き、より詳細な情報提供を要請する予定である。すでに、了承してくださっている人もおり、それまでの間、彼/彼女たちとEメールで連絡をとりあいたい。

いかにして生きやすい社会・世界をつくることができるのかという問題は、学術的課題にとどまらない実践的意味をもっている。CDに関するデュボイスの社会学的研究、人種主義・植民地主義の乗り越えと世界平和の実現を訴えるデュボイスの運動戦略に関する考察、および、マサチューセッツ州の平和団体の理念・運動戦略や平和活動に関わっている人たちを対象とした調査を目的とする本研究は、とりわけ今日のような「戦争の時代」にあって社会的意義のあるものとして位置づけてよいのではなかろうか。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

【論文】

本田量久「W・E・B・デュボイスのアジア論——中国の植民地支配をめぐって」『コロキウム——現代社会学理論・新地平』2007年, 第3号, 52-68.

【学会報告】

自由報告「W・E・B・デュボイスとコスモポリタニズム」2006年6月24日

自由報告「デュボイス社会学における民主化と国家権力」2006年10月28日